

# 生活の伝承 34

発行者 民家園のつどい  
会長 近野厚子  
発行所 福島市五老内町3番1号  
福島市文化振興課内  
「民家園のつどい」事務局  
☎ 024-535-1111(内線5373)

## 民家園は博物館

### （開園40年に思う）

#### 民家園のつどい

幹事 村川 友彦

福島市民家園は昭和五七年（一九八二）八月一日に開園し四〇年を過ぎ民家園つどいの会も同様の年月を経ている。民家園には県北地方や奥会津地方の特徴ある民家のほか、芝居小屋、宿屋など現在十棟程が復原展示され、また貴重な民具も数多く収集展示されている。歴史的にも貴重な資料の民俗博物館であり、規模として全国的にも多くない施設である。

#### 一、民家園誕生をふりかえる

古民家の収集移築復原のきっかけとなつたのは、昭和四五年（一九七〇）八月二八日、福島市の松川町字本町に所在した赤浦屋（街道脇の馬宿と言われた）が、川崎市の日本民家園に移築復原されたことである。また、東湯野の鈴木家が会津若松市の武家屋敷へ移るなど、福島の歴史を知ることが出来る貴重な民家が流出することから、その保存が問題となり民家移築保存の機運が高まつた。

昭和四六年、福島市山田字城裏口の奈良輪家（旧野地家）が改築工事によつて取り壊された。この民家は一七〇〇年代前半の近世における上層農家の旧態を残す旧家であること

が知られていたため、その消滅を惜しんだ篤志家が資材保存をおこなつていた。そして市の要請により寄贈を快諾され、復原保存の動きが始まることになった。福島市は以後、民家の収集にあたり江戸時代から明治初期にかけての民家の寄贈協力を得て復原保存を行なうことになった。

これら収集民家の復原を含めた民家園の建設は、昭和五一・五二年度に建設基本計画が策定された。建設場所について、昭和五〇年代に飯坂町館ノ山等数か所検討されたが、建設条件を満たすものはなく、昭和五三年後半「あづま総合運動公園」に決定された。昭和五四年度には基本計画に基づき東北工業大学草野研究室（代表草野和夫教授）に構想設計を依頼し、同年秋から敷地造成工事が開始された。

民家の復原は、昭和五六年度末までに旧奈良輪家（野地家）、旧小野家、旧箕家を復原し、あわせて民俗資料の展示を目的とした展示館の建設も実施した。そして昭和五七年八月一日に民家三棟、展示館をもつて開園し、名称を「福島市民家園」とした。（昭和五八年三月福島市教育委員会『福島市民家園指導のびびき』掲載から引用した。なお一部は字数の都合で割愛させていただいた。）

#### 二、「民家園のつどい」の設立の経緯

民家園開設の動きに合わせ、文化財指導者養成講座が昭和五六年三月に第一回講座が開設された。受講生有志が協議し民家園事業を含む団体設立の必要性を呼びかけ、昭和五七年

六月五日「生活伝承の会」設立総会が行なわれ発足した。

会長斎藤久一氏、顧問秋山政一先生、会員は文化財指導者養成講座受講者二八名、当面は「福島市民家園の施設を活用した研究、学習などを行なうため、民家園行事に積極的に参加協力する。」ということで、一方、市教育委員会は民家園活用事業の協力団体として、教育長を会長に各関係団体の会長・役員などを会員とする「民家園のつどい」を設立、実行委員会を置き民家園行事を担当することとした。

昭和五七年八月一日民家園が開園し、秋山顧問の指導の下、施設活

用事業が「生活伝承の会」と「民家園のつどい実行委員会」との協力により実施され、施設活用事業の実質的な主体者としての役割を果たした。開園から数年後、この二つの団体の活動は同一人物が多いことから、昭和六〇年六月両組織を解体し新たに「福島市民家園のつどい」を設立し事業が引き継がれた。会長斎藤久一氏、顧問秋山政一先生、会員は個人加入による組織となり活動が継承された。(片平春夫氏稿、  
「平成二八年度民家園のつどい研修会資料」柴田俊彰氏平成二九年度  
発表より引用)

## 二、民家園のあり方とつどいの役割

前述で民家園設置の経緯と福島市民家園つどいの設立経緯を振り返つたが、改めて民家園のあり方やつどいの役割等について考えてみたい。

民家園建設基本計画書の基本構想として、「近世以降の人々の生活・生産を理解するための文化財保存および教育施設としての博物館相当施設を目標とする。」と謳っている。さらに運営について、「民家園の

つどいを市民対象に設置し、利用の便を図る。民家園運営委員会を設置し、民家園の活用に関し意見を聞き、民家園運営を促進する。三年目から担当専門職員を配置し、運営に対処する。」とある。

昭和五八年三月一日現在の「民家園のつどい」役員名簿に会長（教育長）・副会長（三名内一名教育次長）、運営委員長（一名）、同副委員長（二名内一名社会教育課長）、運営委員が十八名（部門別による部長および技術指導を兼務）、ほか実行委員長、副委員長そして事務局は社会教育課文化係とある。

このつどいの役員は民家園運営委員会委員である」とから、民家園の運営の主体的役割を担うことになっていた。

運営委員の兼務する部門は、年中行事、口頭伝承、民俗芸能・遊戯、生活・生産、民俗文化財の五部門にわたり民俗全般にわたっている。つまり民俗博物館としての内容で事業運営が行われることとなっていた。

その後、民家園のつどいが中心となり民家園事業が展開されたが、市担当専門職員の配置は無いままで指定管理者制度が導入され、管理と事業運営が委託となつた。現在の「民家園条例」では、第一〇条により、民家園事業のうち収集を除く事業の計画並びに実施に関する業務が委託されている。

開館当初の民家園の特色は、入園者への制限は特別設けず、見る、上がる、触る、そして行事に参加は自由で、単に展示するだけでなく、施設を活用して伝承の一端を担う、というもので、なかでも年中行事の再現は、「入園者と共に行う→体験学習を基本とし、入園者とつどい

メンバーの一体化による行事の実現を目指とする。」というのが設立時の方針にあり、これが最大の特徴である。

近年、地域の文化財の活用による教育文化の活性化が叫ばれ、さらに観光へと繋げようとする動きがみられる。しかし観光を主目的とした運営のありかたは、民家園の設立の趣旨ではない。復原収集した貴重な民俗資料の保護・保存を行ながら、民家園の特徴を守り、先人たちの生活のなかの貴重な伝承を魅力ある形で実現することであると思われる。

開館当初の民家園の事業運営は、民家園のつどいの運営委員を中心となつて行われ、委員には市の重職の職員も加わっていた。

福島市民家園は立派な博物館施設であり、膨大な収集資料をはじめこれらを含む民俗文化財の研究施設でもあるべきで、さらに地域の歴史を伝える生活伝承の施設でもある。民家園の規模は福島市民だけでなく全国的な利用に充分に応えられる規模と内容を有している。

#### 四、民家園のつどいの活動に思う

文化財保護法には、民俗文化財として有形・無形があり、重要無形民俗文化財の範疇に芸能・民俗芸能のほか、最近民俗技術が対象となつた。民俗技術はその技術の発生又は成立、技術の変遷の過程、地域的特色を示すもの、などに該当するものが文化財の指定の対象となつてている。

一方、普段の生活のなかで行われ伝わって来た「技」(わざ)も貴重な伝承で文化財もある。しかし今消え去ろうとしている。生活の急激な変化によつて長く伝わつて来た生活の中の伝統的な技は不要とな

り、生活インフラの整備によつて火の扱い方も出来なくなつた世代が多くなつてゐる。それらの技は単純とも思われるが、古くから伝えられて来たということのほか、家庭や地域のふれあいや支え合いなど心の文化の豊かさなどを伴つてきた。また「ものを大切にする」ことも教えられる。

福島市民家園のつどいの役割は、まさにそのことをめざし発足したのであり、その活動はこれまで会員や市当局の努力によつて続けられている。しかし、その活動が今や停滞気味となつていて、コロナ感染症の拡大や高齢化によるものなど、さまざまな原因が考えられるが、今後どのように継続するかを模索しながら取り組むべきと思う。

このようない中で活動内容について整理してみたい。

先ず生活の「技」の伝承体験の内容項目について、若干例として挙げてみた。

衣食住に関するものとして針仕事(お手玉作り)・普段着(モンペや袴)の着方・手ぬぐいの使い方(かぶり方)、履物の種類と履き方(草鞋・下駄)など。

食事の用具と場所(ハレとケの食事)、囲炉裏の使い方と座の名称。運搬法について、かつぐ、つつむ、背負う、運ぶなどの体験。子供の遊び、独楽つくりと独楽まわし、凧つくりと凧揚げ、折り紙と紙飛行機飛ばしなどの大会の企画など、思いつくままに述べたが企画の材料は数多い。

これまで田植え、稻刈り、脱穀作業や養蚕など民家園の民具を使つた体験が行われて來た。民家園にある民具の一部を活用し行うこととは

民家園の趣旨でもあるが、収集された資料は保存が優先されることは言うまでもなく、工夫しながら体験し楽しめる機会をつくることが大切である。

多くの復原民家と民俗資料に囲まれた施設で活動できる「つどい」は、本当に恵まれている。この環境のなかでの経験は貴重な機会でもある。今後会員が積極的に参加し、民家園入園者を導くことが出来る体制を早急につくるべきである。つどいがその役割を担うことで、会員の活き活きとした活動が期待できると思う。



## 福島市民家園とともに人生を歩んで

### 民家園のつどい

幹事 菊地 武彦

私は奥会津の昭和村の出身、縁あって福島市に居を構えてすでに六〇年の歳月が過ぎた。

福島市に住み始めたのは昭和三七年（一九六二）四月である。

当時福島には私の興味をそそる建物が数多く建っていた。

福ビル、日本勧業銀行福島支店、富士銀行福島支店、日本銀行福島支店、日本キリスト教団福島教会、福島修道院、片倉工業（株）福島蚕種製造所事務所、竹屋旅館、天戸座等々……。

六〇年を過ぎた現在それらの建物はすべて福島の町から姿を消してしまっている。

かつて福ビルの一隅にあった「柳屋」という喫茶店で、時間を持て余し、独り寂しくコーヒーを飲んで時間をつぶしていたことも、今となつては懐かしい思い出である。

以前にも記した記憶があるのだが、私が古い建物に郷愁を抱くのは、私が小学生から中学生の間住んでいた昭和村の実家に起因するのかもしれない。

私の実家は、江戸時代に建てられた茅葺きの建物で、建坪は五〇坪を少し超える広さを有していた。

その家で、私は明治七年生まれの祖父や明治三九年生まれの父から、

神主を十代以上にわたって続いていることや、家にまつわる話を種々聞かされて育ってきた。

しかし、高校からは家を離れ、その後縁あって福島に職を定めた私であつたが、その仕事は大学時代に学んだことが全く役に立たない仕事であつた。

理想と現実とのはざまに悩んだ私は、酒に逃避し、連日福島の夜の街をさまよい歩いた。

これではいけないと気付き、夜の時間を有効に消化するためには何がいいかと無い知恵を絞つて行き着いた先が、公民館で当時行われていた「市民学校」であつた。

そこで秋山政一先生と知り合つたのである。先生も会津の出身であった。

秋山先生の「福島盆地―明治風土記」という市民学校の五回の講義が終わつた際、有志でこの集まりを今後も続けようではないかという話が出て、それに賛同した人たちでサークルを作つたのが、今に続く「福島盆地を歩く会」というサークルである。

そのサークルの毎月の例会等で、先に記した建物などを巡り歩き、それらに引き込まれていった。

また秋山先生からは、福島にあつた古い民家が県外に流出するという話を聞かされ、切歎扼腕していたことなども思い出される。



1980年代 子ども秋まつりでの秋山先生

そして、ようやく「福島市民家園」が出来るということになり、開園前から進捗状況をチェックしに、秋山先生と共に何度も足を運んだことも、懐かしい思い出である。

民家園開園の日、昭和五七年（一九八二）八月一日、この日は好天に恵まれ、来園者も多く、幸先のいいスタートであつた。

爾来四十年、私は民家園に関わり続けてきた。

話が前後するが、市の教育委員会では、昭和五六六年（一九八一）五月に「文化財指導者養成講座」という制度を作り、民家園のお手伝いをする人たちの養成を始めていた。

私はその第一期生であった。ただ養成期間が三年ということで、民家園の開園には間に合わなかつた。

それを待てないので、民家園で行う年中行事を行うために出来たのが現在の「民家園のつどい」である。

民家園での年中行事の再現、これが松川町の馬宿鈴木家「赤浦屋」を川崎の「日本民家園」にさらわれた「福島市民家園」の目玉であつた。

開園当時の年中行事は、とにかく大変賑わつた。子どもたちの数が今

とは全く異なつた。

そして福島市の力の入れ方も段違



1988年 秋山先生の昔話に聞き入る多くの子どもたち

ズボンをまくつて田植えを行つたりもした。

今となつてはよくやつたなあと思うこともある。実際の結婚式を民家園で行つたのである。

あれは昭和五九年(一九七四)四月二十九日のことであった。

「大正時代の結婚式」と称して、渡辺さんという方が旧渡辺家を舞台に、実際の結婚式を行つたのである。

当時の様子はビデオで記録してあるので、今でも見ることが出来るはずである。

私たちお手伝いの人たちは、ビデオに映らないように気をつけ、木々の間を縫いながらバックアップしたことになつて思ひ出される。とにかく、あの頃は、民家園に来るのが楽しくてならなかつた。行事の日を今かいまと待ち望んでいたものである。

あれから時間は容赦なく過ぎて行き、私の体も以前の「とく自由にならなくなつてしまつた。

そしてまた、民家園を訪れる人たちの顔ぶれも変わつていき、それに伴い、民家園に対する人々の心の持ち方も変わつていくのはやむを得ないことではあるが、当時の農村の雰囲気や当時の行事は、一度途絶えると復活は難しい。これからも大事にしていかなければならない。それについて、「民家園のつどい」会員の減少と高齢化が著しい。早急に対策を講じなければならない喫緊の課題である。

興味を持つてゐる人はいるはずである。一日も早くボランティアに関わる人たちへの声かけを積極的にしていただきたい。

最後に民家園に関わってきた感想を述べてみたい。

現役時代の仕事仲間もいいものであるが、仕事とは全く関わりのない人たちとの付き合いはまた格別である。別世界に遊ぶ感がある。異空間での遊びは最上である。

私はこの六月で八四歳になる。車の運転も間もなく止めざるを得なくなるであろう。そうなれば、民家園に来ることもままならなくなる。四〇年もの間、遊ばせてもらった民家園には、ただただ「ありがとう」と頭を垂れるのみである。

出来得れば、次の世界に行つても、このような居心地のいい場所で遊び続けたいと、心ひそかに思つてゐるこの頃である。